

続

徒然
つれづれ

活力の発露

桑野 巍

「いまの若い者は…、と若者批判をし始めたら自分もトシをとったことですね」と40歳過ぎの真面目人間が言う。40歳前後になると仕事人の多くは人生の折り返し点を迎える。これまで生きてきたことと今後のことも多少考えるようになるのだろう。体験的には「四十而不惑」は全く当てはまらず、私は「40にして惑い…」だった。自分の能力の限界を感じとっていた。眼を見開くと世間には40歳にして指導的な立場に立っている人も沢山いた。役に立つ社会人を育てよう、と部下の能力を引き出してやることに取り組む有能人もいた。半面、スランプに陥っている人もいた。

40歳は立ち止まって考え込む年齢かも知れない。「自分はなぜ生きるのか」「なぜ働くのか」という難問にぶつかるのもこのころだ。この難問について、童門冬二先生はモチベーションとして8つの欲求をあげている。それは①生活維持（食うだけの収入）②生活安定（収入の長期保障）③仲間化（集団欲）④上昇志向充足（出世欲）⑤趣味の充足願望⑥自分の人格（人間性を尊重されたい）⑦自己実現（担当部署・適材適所など）⑧した仕事に対する公正な評価である。

こうした欲求は公務員に限らず、企業所属のビジネスマンも持っていると思う。では不特定多数の住民はどうだろうか。住民の多くもこうした欲求を持ち続けているものの、隣の芝生ばかり見ている人も多い。井戸端会議を盗聴したわけではないが「公務員はいまでも給料や退職金が高いらしいよ。テレビでも言っていたわ。仕事はひまらしいのに」という批判と嫉妬が聞こえてくるから不思議だ。

それでいて多くの住民は地域の自治体に対して「あれをやれ。こういうこともやれ」と勝手気ままに要求する。これを住民のニーズというらしい。しかも住民の姿勢は絶えず高圧的で、役所の人は“下僕扱い”にされることが多い。こうした光景に出くわすと、公務員はいつから住民の奴隷に格下げされたのか、可哀想に思う。こんな時「これでは役所自体が活気を失ってしまう」という心配がつきまとうこともある。

この先の地方自治体の通り道は住民ニーズの激増（とくに高齢者福祉対策など）と財政の窮迫で台所事情が「反比例の原則」というデコボコ道になると予想しているのに、役所という職場を暗くしていいのにかーに突き当たる。自治体が活力を失うと地域は活気を失ってしまい、地域社会は間違いなく衰退の道を辿り、難問解決どころではなくなる。自治体運営についての住民の理解が必要なわけで、ここは住民も議会も役所も猛反省しなければならない。

ある役所の20年選手は「役所内評論家が横行しているのも事実だし、地道な行政サービスを続ける職員よりも口が達者で実質的な怠け者が優遇されている場合が多いのも事実」とこぼしながら「僕たちがもっと強くならなければ…」といい、15年選手は「何ごとにつけても“根回し”が必要で気を遣うことが多すぎる。○△委員会をやたらに作り、会議を増やすものだから時間はかかるし不完全燃焼状態が続く」と本音で話してくれた。このほか、議会の説得や組合との関係などが複雑に絡んで、無気力を産み問題解決への道が遠くなっていることを嘆く選手の声も耳にした。

民間企業はいつの時代にも崖の淵に立たされているという厳しさを持ち、適正な利潤を上げなければ存在価値がないという意識を自分たちの活力に繋げているから役所とは別ものだ。企業人から役所をみると「公務員の場合、給与の平等と前例主義が欠点」とずばり指摘「僕皮肉屋ではないですよ」と断る。

東京都庁で長期間活躍された童門先生は活力再生の淵源について「公務員自身が中流意識を捨てて飢えと貧しさの感覚をもち、もっと怒れ。今の公務員はおとなし過ぎるし、あいまいにニヤニヤし、狡（ずる）そうな笑顔を浮かべるな」とおっしゃる。そして「公務員批判はほんの一部だから『私たちはまじめ』と声高に言い返せ。メディアへの一斉投書運動を展開するくらいの勇気も必要」とつけ加えた。40歳は組織の中心、「定年まであと何年」など考えず、本物の活力発揮を望みたい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）